慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160－8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211　内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝(3353)1211(大代表)

第53回東医体　総合3位！

3連覇はならずも来年への期待高まる

2度目の東医体3連覇という未踏の領域に踏み込むべく臨んだ第53回東医体であったが、惜しくも優勝を逃す結果となった。総合3位という好成績であったが、十分に優勝を狙える実力をもっていただけに悔やまれる（8月20日現在、本紙調べ）。

第52回東日本医科学生体育大会（夏季の部）が、8月の第1週から2週にかけて行われた。本年度主管を務めたのは杏林大学、新潟大学、日本医科大学、防衛医科大学。連日の猛暑の中での競技ではあったが、大きなトラブルもなく、大会は幕を閉じた。

今大会、慶應は惜しくも優勝を逃したものの、非常に善戦した。優勝した秋田大学と慶應との差はわずか9ポイントである。優勝の秋田大学、準優勝の順天堂大学、3位の慶應義塾大学、以下上位10チームくらいの実力が非常に均衡しており、点差はほとんど開いていない。慶應は優勝競技が少なかったが（3部門：水泳部男子、ゴルフ部男子、陸上部女子）、多くの部が健闘し、入賞を果たした結果総合3位という栄誉を手にすることが出来た。上位チームには優勝の秋田大学をはじめ、新潟大、山形大、東北大ら東北勢が健闘したのが今大会の特徴と言えそうだ。

紙面では6連覇という華々しい成績を残した水泳部、3連覇のゴルフ部、2連覇の競走部（女子）を取り上げるとともに、惜しくも連覇を逃した競走部（男子）、ヨット部、馬術部、硬式庭球部、見事団体・個人で健闘を果たした柔道部についても来年へのエールをこめて結果を紹介する。

※テニス部、弓道部に関しても4面に掲載。

	1位	2位	3位
総合順位	秋田	順天堂	慶應
陸上(男子)	新潟	慶應	東大
陸上(女子)	慶應	新潟	秋田
硬式野球	獨協	千葉	順天堂
テニス(男子)	福島県立	順天堂	日大
テニス(女子)	筑波	日大	山形
ソフトテニス(男子)	自治医	山形	東北
ソフトテニス(女子)	獨協	旭川医科	北大
卓球男子	群馬	筑波	千葉
卓球女子	日医	群馬	秋田
バレーボール（男子）	自治医	防衛	東北
バレーボール（女子）	山形	防衛	女子医
バドミントン（男子）	埼玉医科	新潟	秋田・弘前
バドミントン（女子）	弘前	岩手医科	秋田・山形
サッカー	順天堂	獨協	
バスケットボール(男子)	東海	新潟	日大
バスケットボール(女子)	女子医	福島県立	筑波
柔道(男子)	東海	東北	新潟・山形
柔道(女子)	獨協	福島	新潟・東海
剣道(男子)	昭和	順天堂	東北・筑波
剣道(女子)	群馬	福島県立	東北・女子医
弓道	東北	岩手医科	千葉
水泳(男子)	慶應	順天堂	防衛
水泳(女子)	秋田	山形	
ヨット	順天堂	慶應	千葉
ボート	山梨	自治医	福島県立
馬術	女子医	山梨	信州
ゴルフ(男子)	慶應	聖マリ	順天堂
ゴルフ(女子)	筑波	千葉	旭川医科

水泳部
男子水泳部 6連覇の偉業達成！

6連覇を喜ぶ部員たち

8月10日(火)、11日(水)に横浜国際プールで行われた水泳競技において、男子水泳部が優勝し、この大会6連覇となった。5連覇した大学に送られる永久杯を昨年手に入れ、新たな気持ちで望んだ今大会。「今年からまた優勝を積み重ねていきたい」と前主将の梶川慶太君(4年)が部を引っ張り、見事優勝を果たした。

「水泳はチームスポーツの側面が強いことを実感した」と梶川君が話すように、今回の優勝は精神面での強さによるものだったようだ。最初の種目である400mメドレーリレーでは、昨年2位の雪辱に燃えるあまり、引き継ぎで攻めたために引き継ぎ違反で失格となってしまった。いきなりの失格にチーム一同動揺したはずだが、全大学の中で一番練習をしてきたという自信から、すぐにチームとして気持ちを立て直し、以降の競技で好記録を連発。多くの部員がベストタイムを更新して大会に臨んだことなども功を奏し、初日を総合得点47点と1位で終えた。とはいえ、2位の順天堂大学との差はわずか9点。かなりの接戦で折り返した。

リレー優勝のメンバー

2日目には個人種目である200m個人メドレーで林啓太君（6年）が自身の水泳部生活6年間で初の東医体個人優勝を果たした。これをきっかけに2日目も部員のほとんどがベストタイムを更新し、800mフリーリレーでも優勝して大会を終えることができた。

昨年度5連覇を達成し永久杯を獲得したが、そこで満足せず、初心に返って1年間努力してきたからこそ実現できた6連覇なのだろう。梶川君も水泳部員たちの頑張りには胸を張る。

「この大会を通じて感じたことは"仲間"の大切さでした。私達三四会水泳部は男子も女子も同じ練習メニューをこなしています。それぞれのレベルに応じた強度で分かれてはいますが、秋は週3回、1月からは週4回の練習をやってきました。そうやって日頃から仲間同士で支え合ってきたからこそ、東医体という大舞台でも辛いときは互いに励まし合い、そして嬉しいときは共に喜ぶことが出来たのだと信じています。この6連覇は男子部員だけでなく、女子部員やマネージャーの存在なしには成し得なかったことです。また、OB・OGの皆さんたちのご協力もあり、私達92回生が掲げたスローガン『SMILE』の通り、部員全員が笑顔で大会を終えることが出来ました」

来年の東医体に向けてまた新たな一年が始まる。どこまで記録を伸ばせるか、どんな試合を見せてくれるか、今後の水泳部にも期待したい。

（4年　手嶋将人）

ゴルフ部
男子団体優勝！女子は団体5位

ゴルフ部は今年も男子団体で優勝し3連覇を果たし、個人の部で4位阿部善彦君(6年)、6位津軽開君(3年)が入賞した。女子は団体では昨年に続く3位入賞を逃したものの、女子個人の部で田中美波さん(3年)が連覇を果たす好成績となった。

今年度の東医体は福島県棚倉田舎クラブで8月2日から4日にかけて開催された。慶應ゴルフ部は1ヶ月前から試合コースでの練習ラウンドを開始し、さらに直前には合宿をして試合に臨んだ。ラウンドを繰り返し、それぞれのホールの特徴をつかんでいく。そんな入念な準備を重ねながら、勝負の東医体に向けて順調に仕上げていった。

女子個人優勝の田中美波さん

東医体ゴルフ部門では、男子が2日かけて3ラウンドを、女子が最終日に1ラウンドを回る。男子部では1日ごとに各大学のメンバー5名のうち上位4名のスコアを合計したものが、女子部は各大学のスコア上位2名の獲得ポイント数を合計したものが団体の成績となる。今年は初日に雷鳴で競技が中断するアクシデントがあった。しかし、それにのまれて集中力を切らすことなく、落ち着いてプレーした結果、価値ある優勝をつかんだ。なお、男子団体優勝スコアは816（2・5ラウンド）であった。

男子は個人4位入賞の阿部善彦君（6年）がスコア195、同6位入賞の津軽開君（3年）がスコア199と慶應の一番手、二番手として力を発揮し、男子団体優勝へと導いた。女子は個人で連覇を果たした田中美波さん（3年）がスコア77と圧倒的な強さを見せた。

毎年連覇を果たしている男子であるが、今年は団体2位の聖マリアンナ大学が例年以上に強く、レベルの高い戦いにとても焦ったという。しかし、自力に勝る慶應が日頃の練習のみならず、試合コースでの入念な準備の成果を遺憾なく発揮した。「部員全員が力をあわせて戦い抜いたと思う」と主将の渡邉佳太郎君（4年）がコメントしてくれた。

表彰式後の集合写真

渡邉君は今回の東医体を振り返って、「5、6年生が中心のメンバーであったが、今後は4年生以下の部員でも勝てるようなチームにしたい」という。確かにベテランが多く活躍するゴルフ部であるが、選手の層が厚いことも特徴だ。そうした点が昔から男女共に安定した強さを誇る理由の一つではないだろうか。上級生、下級生問わず、部員が選手選考をかけて切磋琢磨することで、個人のみならず部全体のさらなるレベルアップが期待される。今後もゴルフ部から目が離せない。

（4年　山西竜太郎）

競走部
女子優勝！連覇達成！男子は惜しくも準優勝

今年度東医体は8月3日、4日に埼玉県上尾市上尾運動公園陸上競技場で開催された。昨年まで東医体8連覇中の男子、黄金世代の89回生が卒業して迎えた今大会であったが、準優勝と9連覇に及ばなかった。女子は前年度チャンピオンというプレッシャーをはねのけて、見事に連覇を果たした。

東医体陸上部門では各競技の8位入賞者までに得点が与えられ、大学ごとの総計点が争われる。「89回生が引退し、選手層は薄くなったが、みんな守りに入らず、一つ上の順位を目指して競技に取り組んだ」という主将の松岡信成君（4年）の言葉にあるように、選手一同が攻めの姿勢を貫いた結果、実に8割以上の選手が今大会でパーソナルベストを更新することができた。男子トラック種目では、入来景悟君(6年)が100mで第2位（11"13）、200mで第3位入賞（22"97）。大島和輝君（5年）が5000mで第3位入賞（15'55"60）を果たした。さらに4×100mリレー（小林君、竜崎君、鳥光君、入来君）が三四会記録更新のみならず、大会タイ記録である42"48で優勝した。この記録は各選手が個人種目後にリレーに出場して出したタイムであることから、リレー種目に参加を絞った場合41秒台が予想され、よりハイレベルな関東学生陸上競技選手権大会（関カレ）2部の強豪校との互角な戦いが見えてきた。男子フィールド種目では、橋山卓弘君（2年）が走高跳で第2位（1m87）、竜崎俊亘君（3年）が走幅跳で第2位（6m48）、福田亮介君（6年）が槍投で第3位（49m79）と好成績を残した。

喜びいっぱいの女子部員

女子も多種目で慶應の活躍が目立った。工藤祐実さん（2年）がトラック種目の400mで三四会記録となる60"83で見事優勝、200mでは第3位（26"97）に入賞し、フィールド種目でも走高跳で第3位（1m40）と素晴らしい成績で女子優勝に大きく貢献した。また、中小路絢子さん（5年）は100mで第2位（17"83）、吉津亜矢帆さん（2年）は砲丸投で第2位（7m24）に入賞した。女子の4×100mリレー（笹山さん、工藤さん、中小路さん、吉津さん）は長らく山梨大学の独壇場であったが、今大会で遂に慶應が打ち破り、53"16で見事優勝に輝いた。

男女揃っての集合写真

男子は惜しくも東医体9連覇とならなかったが、「黄金世代が抜けた中で、各部員が攻めていけたことは良かった。ただ、負けるために練習しているわけではないから悔しい」という松岡主将の言葉からは、練習へのストイックな思いとレベルアップへの強い意志が感じられた。女子も来年以降、世代交代を経て、新たなチャレンジが始まる。今後も競走部の活躍が楽しみだ。

（4年　山西竜太郎）

ヨット部
惜しくも準優勝 3連覇ならず！

昨年まで東医体2連覇中のヨット部であったが、今年は、惜しくも順天堂大学に優勝を奪われ、準優勝という結果に終わった。

「初日に4位という結果を受け、部全体として気持ちを切り替え奮戦し、2日目には2位まで浮上したが、最終的に1位との差を縮められなかった。3連覇を達成できず非常に悔しいが、人数の少ない中、準優勝できて達成感を感じている」と主将の楠本竜也君（4年）は振り返る。

個人優勝を果たした伊賀・光石組

今回もしっかり団体では準優勝という結果を残し、個人では、優勝した伊賀・光石をはじめ、個人3位入賞した谷、荘所など、非常によい結果を残し、普段より徹底して行っている基礎練習を重視した練習の成果と言えるだろう。

強豪としての地位を確立しているヨット部には、今後とも活躍を期待したい。来年は是非優勝杯を奪還してもらいたい。

（4年・後藤　信一）

個人3位入賞の谷・荘所組

柔道部
団体戦ベスト16 個人戦2階級準優勝

新潟で行われた柔道競技では、慶應が昨年から大きな躍進を果たした。団体戦ではベスト16で昨年の予選リーグ敗退よりも成績を上げ、さらに個人戦では桐野創君（4年）が無差別級で、井上凡君（2年）が66キロ級でそれぞれ準優勝のすばらしい成績を収めた。桐野君の喜びの声を取材した。

団体戦における飛躍の秘訣を「それぞれの選手が自分の仕事を自覚していること」と語る桐野君。「この試合は自分が勝たなきゃ行けない、自分はこの試合で引き分けに持ち込めば勝てるなど、部員それぞれが役割をこなす気持ちが強いと思います。現に今年の予選リーグは引き分け一つの差で通過できました」

個人戦で昨年のベスト8から大きく躍進した理由は、昨年の代から強化した筋トレと乱取り練習を今年も維持したことと、全塾柔道部や社会人クラブの精鋭たちが稽古に参加したことで一回の練習がとても充実したためという。体力的にも自分を追い込み、常に緊張感を持った練習によって強くなれたのであろう。

桐野君にとって今年の東医体で最も印象的だった試合は、個人戦準決勝だ。「相手は一昨年、昨年と負けている無差別級2連覇の強敵。3度目の正直という訳ではありませんが、もう負けたくないという気持ちはかなり強かったです。開始早々大内刈りで有効をとれ、そのポイントを守りきりました。終わった瞬間、うれし涙が溢れてきて、柔道をやっていてよかったと心から思えました」

また桐野君はこの東医体まで1年半もの間主将の大役を務め上げている。「柔道部は同学年で私一人ということもあり、主将をやる前はすごく心配でした。しかし先輩・後輩のみんなと、つらいときは助け合い、うれしいことは分かち合うということができたからこそ、こんな私でも主将を続けてこられたのだと思います。部員の皆にとても感謝しています」と部を引っ張ってきた思いを語ってくれた。

来年の抱負は、「団体戦ベスト8以上、個人戦無差別級優勝」と力強く語った。さらに「優勝したらしっかりダイエットしたいと思います」とお茶目な一面も見せてくれた。来年は柔道部の更なる飛躍を見られそうだ。

（4年　山本一希）

2枚の賞状とともに笑顔の柔道部

馬術部
団体戦6位は無念 個人戦準優勝で挽回

昨年度の馬術競技は慶應大学の総合優勝であったが、今年度は総合6位と厳しい結果に終わった。しかし主将の蛭川和也君（4年）が馬場馬術個人競技で準優勝を収めている。複雑な心境の中、蛭川君は取材に応じてくれた。

団体戦の敗因を聞くと、「一人一人の技術は決して優勝に届かないものではなかったと思います。チーム力が足りなかったと思います」と肩を落としながらも話してくれた。

個人戦の準優勝については、素直にうれしいと蛭川君は話す。しかし、悔しい気持ちもある。「障害団体競技で、同減点にもかかわらずタイムの差で信州大学に負けてしまいました。信州大学は昨年度の障害団体競技決勝戦で敗れた相手なので、よけいに悔やまれます」

しかし、これからの希望は大きい。「部の運営から毎回の練習まで、部員一人一人が参加して部を作り上げています。さらに、自分たちで面倒を見ている馬は先輩たちから受け継いだ大切な仲間です」と蛭川君は言う。また「いつでも練習できる環境と、全塾体育会の優秀な仲間たちとともに部活動を行えることが我々の強みです」とも話してくれた。このまま練習を続けていけばチーム力も強化され、東医体でもすばらしい結果が残せるだろう。

個人2位の蛭川君

今シーズンのこれからの試合について、「今年は東医体以外の試合でもまだ結果が出せていないので、後半は気合いを入れ直して臨みたいと思います」と決意を新たにしている。来年の東医体についても「女子医大から優勝杯を奪い返します！」と強気なコメントを寄せてくれた。来年は再び優勝に湧く馬術部を見せてほしい。

（4年　山本一希）

鑑往知来

グローバル製薬企業の中で日本市場を担当すると、日本だけに必要な項目を手当てする事が重要な仕事になります。しかしこの1年、情報・生産・流通のボーダレス化、世界的経済悪化、BRICSの大発展と日本の購買威力低下の中、日本向け特別仕様が難事になってきているのを実感します。

新薬開発の臨床試験をみると、国家戦略として米国方式を導入した韓国が快走していて、最近もある抗癌剤開発の実施速度を目の当たりにしました。疾病機序を報告したのは日本の研究者でしたが、ソウル大学が臨床試験結果を世界最高の臨床系雑誌と学会で報告しました。また、薬の製造現場のグローバル化については、業界団体が窮状をうったえています。労働コストの安い国の原体製造会社から、「コスト摩擦発生、日本仕様に応えた少量の特用生産が困難。以降、出荷せず」とe-mailがさらりと来て、日本での生産が困難に陥った例。日本だけに必要かつ日本語で作成・提出という書類の要請に、「我々、日本語ができませんので対応不可です」と返答され、日本での製造が停止という事態の頻出、というものです。

これらの例は、言葉と距離の壁が消失したグローバル市場において、国際標準外仕様で行動する場合に覚悟すべきリスクのごく一端です。今後、どこに産業の価値やゴールを置くのか、その選択には充分に世界の今と将来を考察して、明確な意思を持つことが重要と思います。その際のヒントは恐らく、身近にある障壁の認識と、その昇華の覚悟ではないかと考えます。なぜなら、世界標準という高速艇で疾走するグローバル・プレーヤーに伍す望みを失うべきではないと思うからです。

市場では第二段のプレーヤー交代が完了しつつあります。日本が世界に優る価値について冷静に認識して、その価値が誇るべきものならば、世界経済の標準ルールの下で最大化する実践が、切実に求められていると感じています。

（ファイザー株式会社　高橋栄一　70回）